

国立東京療養所にて

力より力へ

――詩篇第84篇――

『愛泉』誌第8号、1956年12月24日発行より転載

1956年11月25日

小池辰雄

巡礼の歌 幸福なるかな、汝の家に住むもの 曠野の泉 神は日なり盾なり キリストこそ神
殿 力より力へ 聖霊の能力 永遠の生命の水

【詩篇84】

ギテトの琴にあわせて、うたのかみ伶長にうたわしめたるコラの子のうた

1 万軍のエホバよ、

なんじの帷幄あべぼりはいかに愛すべきかな。

2 わが靈魂たましいはたえいるばかりに

エホバの大庭おおにわをしたい、

わが心わが身はいける神にむかいて呼ばう。

3 誠まことやすずめは窩やどりをえ

つばくらめ 燕子はその雛をいるる巢をえたり。

万軍のエホバわが王わが神よ、

これなんじの祭壇なり。

4 なんじの家にすむものは福さいわいなり。

かかるひとはつねに汝をたたえまつらん。

セラ

5 その力なんじにあり、

その心シオンの大路おおじにある者は

さいわいなり。

6 かれらは涙の谷をすぐれども、

其処そこをおおくの泉あるところとなす。

また前の雨は

もろもろの恵みをもて之をおおえり。

7 かれらは力より力にすすみ、

遂におのおのシオンにいたりて

神にまみゆ。



8 万軍の神エホバよ、
わが祈りをききたまえ。

ヤコブの神よ、

耳をかたむけたまえ。

セラ

9 われらの盾なる神よ、みそなわして、
なんじの受膏者の顔をかえりみたまえ。

10 なんじの大庭にすまう一日は

千日にもまされり。

われ悪の幕屋におらんよりは、
寧ろわが神のいへの門守とならんことを欲うなり。

11 そは神エホバは日なり盾なり。

エホバは恩と栄光とをあたえ、

直くあゆむものに善物をこばみたもうことなし。

12 万軍のエホバよ、

なんじに依頼むものはさいわいなり。

●巡礼の歌

今日は久しぶりで詩篇を学びたいと思います。

1 万軍のエホバよ、なんじの帷幄はいかに愛すべきかな。

と。この84篇は1節〜4節までと、5節〜8節までと、9節以下の、三段に分けられてい
ると考えることができます。それは、4節の終りと8節の終りについております「セラ」
という語でも判るわけです。

この詩は、お読みになつてすぐ感づきますように、巡礼の歌であります。いつごろ出来
たかということも、また学説がまちまちですが、ここに詠われている神殿というのは、バ
ビロニヤ捕囚から帰つて来て、紀元前515年に第二神殿が出来ましたが、その第二神殿のこ
とであります。従つて、神殿中心のユダヤ教のもとに作られたものであろうというのが大
体の学説ですが、中には新しい学者でも、これは第一神殿のとき、即ち捕囚以前のことで
あるという人もあります。それは9節の、

「なんじの受膏者の顔をかえりみたまえ」

の「受膏者」という語が王を指すとするならば、捕囚期以後は王がいなわけですから、
そこで、どうしても捕囚期以前であるということです。私はどっちに決めるわけではありま
せんが、捕囚期以前にこの原型というものがあつて、それがなお、捕囚期以後に巡礼の歌
としての一形体をはつきりと強くもつてきた、といったような成立ではなからうかと思ひ
ます。概して詩篇というものは、ただ単に、ある時期に個人が創造つたというだけでなくて、



時代を経て、礼拝用にされるために形式が整ったのが多いのではないかと思います。

●幸福なるかな、汝の家に住むもの

「万軍のエホバよ」

という、一番先に、非常に力強い叫びかけをしています。これは詩篇46篇にも、この「万軍のエホバ」という表現が出てきますが、詩篇第84篇は、全150篇の中でも非常に著しい詩篇の一つであります。

「なんじの帷幄はいかに愛すべきかな」

帷幄は「住処」という字でありまして、それが宮のことにも使われる。即ち、

「汝の宮はいかに慕わしきものであるかな」

であります。

2 わが靈魂はたえいるばかりにエホバの大庭をしたい、わが心わが身はいける神にむかいて呼ぼう。

「わが靈魂」といい、「わが心」といい、「わが身」といつているところに注目したいと思います。靈魂と心と身と、要するに全存在をもつて、全身、全人的にエホバの大宮を慕う。即ち、神殿を非常に慕っている。「大庭」というものは、これはむしろ、その神殿の奥には入れない一般の人のための場所でありまして、その「大庭を慕う」という言い方になるわけです。

とにかく、エルサレムの神殿というものが中心であつて、ちょうど、イスラム教においてメッカが中心であつてメッカに向かつて巡礼しているように、もしこれが捕囚期以後ならば――いわゆるディアスポラ・ユード（散在ユダヤ人）です――四方に散らされたユダヤ人が特別な祭の時にエルサレムに巡礼にやつて来る。そういったときの「上りの歌」です。日本人は、民族宗教からいえば伊勢神宮というようなものが中心で、お詣りに行くといったことでありましょう。しかし、それよりもっと切実な意味において、彼らにとつてはエルサレムの神殿というものは、その宗教的生活の本当の中心になっていた。そういうことは、私たちにはちよつとこれを読んでもピンとこない。特にカトリックの人たちならば、ローマということでしょう。そういった場所的な中心を私たちは特に持たないから、旧約の宗教において神殿中心の觀念というものはピンとこないが、一応、私たちはこのユダヤ人の気持ちになって、エルサレムの神殿に向かつて彼らの魂の慕い求めるところに行きたいという気持ちでもつて私たちも一応これを読んでいかなければならないと思います。

全存在をもつて、この神殿に向かつていく。神殿が彼らにとつて即「活ける神の場」であるというような気持ちがありますので、この慕い求める気持は非常に切実なものです。特にこの詩篇の作者においてはそうであります。決して形式的にいつているではありません。神殿に行くことは、神のもとに行くことであるという非常に素朴な気持なのです。



3 誠^{まこと}やすずめは窩^{やどり}をえ燕子^{つばくらめ}はその雛^{ひな}をいれる巢^ねをえたり。万軍のエホバわが王わが神よ、これなんじの祭壇なり。

ちようと、浅草の観音様に鳩がいるような具合に、雀や燕、あるいはこの燕を野鳩といふような具合にとる人もありますが、燕や雀や鳩といったようなものが巢をくつて、そして雛を入れる巢を得ている。全くどうも羨ましいことだなあと。

「これ汝の祭壇なり」

と言いまして、巢を得ているのは即ち祭壇のほとりにある。それで神さまを、

「万軍のエホバ、わが王、わが神よ」

と非常に畳みかけて呼んでおりますが、そこに住みたいものであるということです。

4 福^{さいわい}いなるかな、汝^{きみ}の家に住むもの。

と言って、雀や燕^{うらや}を羨^{うらや}ましがっています。

かかるひとはつねに汝をたたえまつらん。

即ち、「生活がいつも讚美であるなあ」ということです。それはまたエルサレムに住んでいるエルサレムの町の人たちは、この神殿のほとりにおりますから、ちようと燕と鳩と同じように、

「私たちは遠くにいるが、あのエルサレムの人たちは羨ましい。神殿に自分も住みたいなあ」

と、こういったわけであります。

●曠野の泉

5 その力^{ちから}なんじにあり、その心シオンの大路^{おおじ}にある者はさいわいなり。

その力は汝にあり、その心シオン——原文にはシオンという言葉はないけれども——の大路にある者は幸福^{さいわい}である。京都の都大路といいますが、正にこのシオンの大路、シオンはエルサレムの東の方にある丘の名前ですが、それが同時にエルサレムの名前にもなります。このシオンの大路にある者は幸福であると。

「その力なんじにあり」

その力の根柢を神にもっている者、その心の落ち着きどころをシオンの大路にゆつたりともっている者、これは幸福である。

6 かれらは涙の谷をすぐれども、其処^{そこ}をおおく^{おほく}の泉あるところとなす。また

前の雨はもろもろの恵みをもて之をおおえり。

この「涙」という字は、「バーカー」あるいは「ベカー」といいますが、「ベカの樹」という樹がある。バルサムのような樹でありまして、樹脂を非常に滴^{したた}らせるんだそうで、それを涙に例えたのかも知れない。あるいは、この樹の生えている所は非常に乾いた水のない谷あいであつて、そして水のない潤^{うるお}いのない谷あい、ベカの谷、ベカの生えている谷は潤



いのない谷、そこにしかながら、泉が湧いてくる。

「そこを多くの泉あるところとなす」

と。それを「涙」という言葉に読み違いをして、まあ怪我の功名みたいな訳なのでありますが、ルッター訳ドイツ語では「なやみの谷」、英訳では「バーカー」となっています。それで、「そこを多くの泉あるところとなす」と。また、「前の雨」というのは秋に降る雨であって、それから新しい農期が始まる。夏の旱の後をうけて、初めて雨が降り出すと、どんな伸びていくわけです。「前の雨」は恵みの雨でして非常に大事なんです。

この「多くの泉あるところとなす」の「泉」という言葉を、少しイザヤ書から引っぱってみましょう。先ず、イザヤ書35章の有名な、曠野に花咲くところです。

「そは荒野に水わきいで沙漠に川ながるべければなり」(イザヤ35・6)

というように、枯れた沙漠に池が湧き、川が流れるというわけです。同じイザヤ書に

「乾ける地を水のみなもと成さん」(イザヤ41・18)

という終末的な消息を歌ったところがあります。同じく43章19節に、

「われ荒野に道をもうけ沙漠に河をつくらん」(イザヤ43・19)

ここのような苦難の谷が歓喜の園に化する「樂園観念」は終末的な救いの現実を意味するものです。

7 かれらは力より力にすすみ、遂におのおのシオンにいたりて神にまみゆ。

8 万軍の神エホバよ、わが祈りをききたまえ。ヤコブの神よ、耳をかたむけ

たまえ。

という、実に不思議な言葉でありまして、「力より力に」をルッターは「勝利また勝利に」と訳していますので、この句はいまの6節とともに、この詩の一つの中心であるわけです。

●神は日なり盾なり

9 われらの盾なる神よ、みそなわして、なんじの受膏者の顔をかえりみたまえ。

「エホバはわが盾である、城である」

というふうな言い方は、詩篇によく出てくるのでありまして、例えば詩篇の18篇にそれが非常に畳みかけて出てきます。大体これは神さまが力であることを表現して、いろんなその具体的な表現をもつて言っているわけです。一番先に、

「エホバわれの力よ」(詩篇18・1)

と言っている。「盾」というのは昔からいろいろな民族において、非常に重んじられた大事なもので、特に武士にとつては、盾というものは非常に大事なものです。息子が戦死して盾に載せられて帰ることをスパルタのお母さんは喜んだ。また盾を戦場に捨てて戻ったら、もう武人としての名誉は失墜であるとゲルマン人は自覚していたと、かの歴史家タキツスが『ゲルマニヤ』という本の中でゲルマン人の武士道の一面をいっています。ヘブ



ライにおいては、神を「わが盾」と呼んでいるのですから、これは最高の表現です。

「みそなわして、なんじの受膏者の顔をかえりみたまえ」

この受膏者、特に王としての受膏者というように考えても、この場合はよからうと思います。

10 なんじの大庭にすまう一日は千日にもまされり。われ悪の幕屋まくやにおらんよ

りは、寧ろわが神のいえの門守かどもりとならんことを欲ねがうなり。

「門守」という原語は、

「神の家の閬しきみに居らんことを」

とも訳せるらしい。神殿の閬しきみ(門のしきい)ですね。あるいは、

「神殿の所に乞食として在ろう」

と、乞食というような原語に訳す人もあります。

11 そは神エホバは日なり盾なり。エホバは恩と栄光とをあたえ、直くあゆむ
ものに善物よきものをこぼみたもうことなし。

神さまは何もこの場合に、日神といったような意味において「日」といったわけではない。自分を本当に温めてくれ、また光を与えてくれるところの「日」の如き恵みの神という意味だろうと思います。

「エホバは恩と栄光とをあたえ」

即ち、盾は護りの恵みであり、そしてまた、日は栄光であるということです。

12 万軍のエホバよ、さいわいなるかな、なんじに依頼よりたのむものは。

これは第一段の1節〜4節までは、先ほども言いましたように、

「神の家、神殿の中に現実に住んでいることがいかに慕わしいことか」

という角度です。それから第二段の5節〜8節は、この神の宮に至るまでの旅路です。この旅路における姿が表わされ、第三段の9節以下ではその両者を総合して言っているといった具合になっていると思います。

最近に書かれた、モーヴィンケル(シグムンドモーヴィンケル)という、詩篇の研究家で非常に権威ある人の「宗教と礼拝」(RELIGION UND KULTUS)という本がありますが、その序文のところで、

「宗教には三つの相がある。即ち、礼拝と、それから神話的な要素と、それから倫理的なものである。これをまた別な角度からいうならば、敬神と信仰内容と生活のいとなみという三つの相がある。この三つの現象は決してばらばらではないので、これは互いに連関しているものである。ところが、今のプロテスタントの信仰がとかく、教義、教説、認識といった面に傾き過ぎている」

という意味のことを申しています。私がしょっちゅう言ってますように、いわゆる学問教になって、聖書の内容を客体化して、「どうである、こうである」ということを認識し、研究する角度が強すぎてしまっている。ところが、聖書の宗教の事態は、実は一番根本にお



いては礼拝であると、この学者はいうのです、特に詩篇における宗教の事態は。その礼拝が、同時に神を実存的に認識することであり、またそれが展開しては、生活のいとなみとなつて現われていくといった、もつと全体が実存的であることを非常に強調しております。特にプロテスタントの信仰は、その礼拝というものを、言葉の深い意味において、相当失つていやしなかつたことを批判しているわけです。

この詩篇は、そういった礼拝というものが背景になり土台になっているのであつて、それを忘れては詩篇は読めないということです。これは、私が時々そういった意味で私たちの聖書の勉強は、決して単なる勉強ではなくて、集会それ自身が礼拝であるといった角度から申しあげている気持と非常に似通うので、こういった一流の学者が大いにそのことを言ってくれて、私も嬉しく読んだ。ですから、旧約における礼拝というものの内容、内実を、新約の光をもつてもういつぱん読み直すときに、私たちがこの詩篇を読んで、どうしてもピンとこない面が新しい礼拝として受けとれるものと思うのです。

●キリストこそ活ける神殿

それは然らば、どういうことであるかという意味において、いま私たちはこの84篇にたちむかいたいと思うのです。

我々は、教会や無教会ですが――私は無教会の畠から育っておりますが――この作者が、神殿をかくも慕い求めるといふ気持がなかなか掴みにくいわけです。けれども、私たちにとしては、この神殿とは別な神殿である。それは実にヘブル書で最もあざやかに、旧約的礼拝から新約的礼拝への展開が示されています。この旧約における神殿宗教、祭祀宗教、これを最も霊的具体的に身にうけたのがイエス・キリストなのです。

神殿宗教、祭祀宗教の旧約の礼拝を新しくイエスが神殿となり、イエスが祭司となり、イエスが羔羊となり、イエスがその真の礼拝を与えたのです。これを最も明らかに証言しているのはヘブル書です。ヘブル書を読むと旧約の完成の相がそこに表れています。ヘブル書9章の11節を見ますと、

「然れどキリストは来らんとする善き事の大祭司として来り、手にて造らぬこの世に属せぬ更に大なる全き幕屋を経て、

とありますが、神殿の中心には「幕屋」がある。即ち、神殿宗教になる前に、曠野の宗教においては幕屋があつたのです。その幕屋が神殿の中心に置かれて、そして幕屋の中に聖所と至聖所があるわけです。

山羊と犢の血を用いず、己が血をもて只一たび至聖所に入りて、
即ち、神殿の一番奥の至聖所に入つて、

永遠の贖罪を終えたまえり……活ける神に事えしめたまわざらんや……」(ヘブル9・11、14)



と、非常に大事なところですよ。さらに、ヘブル書8章の1節を見ますと、

「今(いま)いう所の要点は斯くのごとき大祭司の我らにある事なり。彼は天にて稜威(みいつ)の御座(みくら)の右に在(いま)し、聖所および真の幕屋に事(つか)えたもう」(ヘブル8・1、2)

即ち天界に神の御座(みくら)があつて、そこに本当の見えないところの霊的神殿がある。霊的神殿に御座があつて、それは真の幕屋である。私たちにとつては、いま天界に在り給うところのキリスト、これが即ち、見えざるところの神殿であります。この見えざる神殿に向かつて、私たちは人生の旅を続けて、その歴史の終りに神の国がきたり、その神の都においてその神殿に行くわけです。

ところが、皆さん見てください。黙示録の21章22節を見ますと、

「われ都の内にて宮を見ざりき、主なる全能の神および羔羊(こひつじ)はその宮なり」(黙示録21・22)

とある。いいですか、この天のエルサレム、天のシオン、そこには神殿がある。ところがその神殿は神・羔羊が神殿あり、宮であるのです。

そういった素晴らしい天界、そのことは既にイザヤがその預言の中にも書いています。例えば、この天界の宮はどんなものであるか、イザヤ書60章19、20節に、

「昼はふたたびなんじの光とならず、月もまた輝きてなんじを照らさず、エホバ永遠になんじの光となり、なんじの神はなんじの榮えとなりたまわん。なんじの日はふたたび落(おち)ず、なんじの月は欠くることなかるべし。そはエホバ永遠になんじの光となり汝のかなしみの日(おわ)畢るべければなり」(イザヤ60・19、20)

そういったわけでありまして、私たちにとつては活ける神が神殿であります。

キリストが即ち、幕屋である。そこで、如何に霊的な具体的なものであるかということがわかり、

「ゲリジムの山でもなければ、エルサレムの山でもなく、いたるところにおいて神を拝する時がくるだろう。いや実にもう来ているのだ」(ヨハネ4・21)

と、ヨハネ伝の4章でサマリヤの女に語られたキリストが幕屋であるのです。それがイエスの宗教です。旧約の宗教が動的な幕屋から、神殿というひとつの場所と形態(かたち)を強く表わすことになりました。けれども、これはついに天界の影でありまして、要するに形態をもつてする徴(しるし)であるのです。その角度から、私たちはこの詩篇の礼拝、神殿礼拝を中心とした詩篇の歌というものに真の光を当てなければ、本当の内容を掴まえるわけにはいかない。即ち、これはみな形であり、影であつて、本当の内容はこれぞ天界に新しく私たちの神殿がある、幕屋があるのです。キリストは、

「神殿を壊(こわ)して三日にして建てる」

と言われたでしょ。



「これはイエス己が体の宮をさして言い給えるなり」(ヨハネ2・21)
そのようにキリストは、自分が本当の神殿であることを自覚しておられたのです。ですから、この詩篇の作者が、

「わが心、わが靈魂、わが身はエホバの大庭を慕い、活ける神に向かって呼ばう」

と詠うとき、私たちは本当にその意味において、靈魂をもつて、心をもつて、身をもつて、イエス・キリストという幕屋を、活ける神殿を慕い、「そこに住みたいなあ」ということになつてくるわけです。パウロも、

「わが願いは身を離れて、このキリストと偕に居らんことなり」

と言いました。このように、天界にキリストという神殿を本当に慕うことができるのは実は、私たちのうちに、私たち一人ひとりの胸のうちにキリストという至聖所が、み霊のキリストという至聖所が既に来ているからなのです。ですから、この天界のキリストという神殿、幕屋を本当に慕いまつることができる。その意味において、クリスチャンがキリストという神殿をうちに宿すとは実に、

「キリストという神殿において、いま自分が在る」

ということなのです。雀や燕子を慕つてやまないこの詩篇の作者の気持は、うつして直ちに、実に私たちがその雀であり、またその燕であるのです。即ち、キリストという神殿の中に宿り、神殿を宿して、

「我れキリストのうちに、キリストわがうちに」

と、パウロが言っている消息はこれであります。

いいですか、これは面白いですね。私たちは既にこの神殿の人なんです、幕屋の人なんです。活けるキリストの幕屋を既に持っています。ちょうど、イスラエルの民が幕屋を担いで曠野を歩いて行ったように、契約の律法、神の櫃を担いで、エホバの重大な律法を担いで歩いたようにですね、私たちはキリストを背負って、いわゆるクリスト・フォロスの如く、キリストを背負う者、キリストという神殿、幕屋をいつも持つて歩く者なのです。

「キリストを着る」

という言葉もありますが、むしろ、

「キリストの幕屋の中に休む」

といったようなわけで、実は、神殿の中にあるエルサレム人を羨むことはない。私たち自身が即ち天のエルサレム人で既にあるのです。

●力より力へ

いいですか。それであるから、今度は5節から8節にある通りに、

「その力、汝にあり」



ということが言えるのです。

「その力、汝にあり、その心、シオンの大路にある者は幸福である」

とは、

「幸福なるかな、その力汝にある者」

ということ、私たちの中に、み霊のキリストが来ていらつしやいます。ですから、その力は汝にある。キリストにおいて力はある。力は既に来ているんです。心は既に神の都の大路にあるんです。でありますから幸福である。

「彼らは涙の谷を過ぐれども、

こんな枯れたような谷を、バーカーの谷を過ぎて行くけれども、人生というこの潤いなき谷を、荒野をまた涙の谷を過ぎて行くけれども、

そこを多くの泉あるところとなす」

と。即ち源泉なるところのキリストを有つていますから、そこを多くの泉あるところとなす。

「前の雨はもろもろの恵みもてこれを蔽い、私たちの上に本当にキリストの実りが成つていくところの恩恵はやつてくるのだ」

と、こういうことになるのです。

人生にはいろいろガサガサした、干からびた事もあるし、また涙が絶えません。正直なところ、私たちは普段、目の外側に涙を流してはいませんけれども、少し深く想うときには涙があるのです。私にも涙がある。具体的にお話しすれば切りがありませんから止めませんが、クリスチャンが一番深刻な涙をもっているはずですが、

哀しみの人というならば、クリスチャンは最も哀しみの人であるはずですが。自分のいろいろな境涯のこともありましようけれども、またこの世の中の矛盾、不義、さまざまな悲惨な出来事を見るとときに、その根本を尋ねるならば、人間というものが如何に損なわれたる、失われたるものであるかということ、「世界苦」(Weltschmerz) という言葉がありますが、その世界苦というものを、実はクリスチャンが一番深く感じているわけであります。

それはパウロがロマ書8章のところで、万のものの呻きを言っているように、

「神の子たちの現われん時を待っている。すべての者が呻いている。自分たち

もそうである」

と言っている。人間界の罪ということに思い当たるときに、私たちが流す最も深刻な涙は、結局それは「罪」という淵におちる涙です。人類共通の、この罪にぶつかると、そういった涙、これは最後の日まで続きます。死ぬときまで続く。けれども、そうかといって、それではもの哀しげなものがクリスチャンかという、決して然らず。またクリスチャンほど、涙と反対に喜びをもっている人もない。

パウロがあればどの艱難と迫害と、さまざまな何度も死にそうになるような事態を突破しながら、牢屋に繋がれながら、なお、喜びの音信を唱えて止まないのは、これはその反



対に、キリストの救いによるところの生命が彼の中にきているからです。キリストの生命が来ているから、キリストという活ける神殿が来ているから、パウロはあのように歓喜の人でありました。

最も深い涙、哀しみの人が、実はそれと全然反対に、喜びと生命の溢れている人である。それが、決していわゆる矛盾というようなことでなくて、そうであるんです、私たちの存在は。だから、深刻な涙を突破していくことができる。これは本当の歓喜が来ているからです。どう考えても、いわゆる思われた世界ではどうにもならない。いわゆる理解された世界ではどうにもならない。これが身についてなければダメなんです。この身に付いているということが非常に大事なので、

「わが^{たましい}靈魂、わが心、わが身は活ける神に向かいて呼ぼう」

と。呼ぶのはまた私たちの中に既に与えられているから、呼ぶことが真に呼べるのであります。そういうわけで、

「彼らは力より力に進み、遂にシオンにいたりて神にまみゆ」

と、本当に天来の力から力に進んでいる。力より力に進むというのは、自分の中に何かだんだん力が出てきて、力から力へ進むというのではない。キリストの、神さまの力が来るから、そこでいよいよ「力より力へ」というのです。ルッター訳では、

「勝利より勝利へ」

とあります。この力ということにおいて、さっきのモーヴィンケルの本にも、

「宗教現象の一番根源的な意識というものは、クラフト、力である」

ということを言っている。著しいところだけにいたしておきますが、イザヤ書9章6節に、

「ひとりの^{みどりご}嬰兒われらのために生まれたり。我らはひとりの子をあたえられた

り。政事^{まつごと}はその肩にあり、その名は奇妙、また議士、また大能の神」(イザヤ

9・6)

この「大能」という字は「力」という字で、この大能の神をあるいは「神的勇者」というような具合に訳す人もありますが、力の神です。これはキリストの預言の箇所の一つです。それから、イザヤ書40章の終りのところが、よく言われる有名なところですよ。

「^{さかん}疲れたるものには力を与え、^{いきおい}勢力なきものには強きをまし加えたもう。年少^{わか}きものもつかれてうみ、^{さかん}壮なるものも衰えおとろ。然^{しか}はあれど、エホバを^ま候ち望むものは新たなる力を得ん。また^{わし}驚のごとく翼をはりてのぼらん。走れども^ま疲れず、歩めども^う倦まざるべし」(イザヤ40・29～31)

と書いています。エレミヤ記16章19節に、

「エホバ我の力、我の城、^{なやみ}難の時の逃場^{のがれば}よ、万軍の民は地の極^{はて}より汝^{きた}に來り、我らの先祖のつげるところ……」(エレミヤ16・19)

と。エレミヤも



「エホバはわれの力、我の城」

と言っています。ミカ書3章に、

「然れども我はエホバの御霊によりて能力身に満ち公義および勇氣衷に満つれば……」(ミカ3・8)

これは大切な聖言です。

●聖霊の能力

今度はマタイ伝にきまして、キリストの言葉です。

「イエス答えて言い給う『なんじら聖書をも神の能力をも知らぬ故に誤っている』(マタイ22・29)

といて、復活のことを言っておられる。

それから、我々にとって大事なところは使徒行伝の1章8節、

「イエス言いたもう『時または期は父おのれの権威のうちに置き給えば、汝らの知るべきにあらず、然れど聖霊なんじらの上に臨むとき、汝ら能力をうけん。而してエルサレム、ユダヤ全国、サマリヤ及び地の極にまで我が証人とならん』(使徒1・7・8)

聖霊を受けるときに汝らは能力を受けるぞと。同じく、4章33節のペテロの言葉です。

「斯て、使徒たちは大なる能力をもて主イエスの復活の証をなし、みな大なる恩恵を蒙りたり」(使徒4・33)

6章8節に、これはステパノのところでは。

「さてステパノは恩恵と能力とに満ち、民の中に大なる不思議と徴とを行えり」(使徒6・8)

8章13節、ここはピリポがシモン(魔術師シモン)よりも素晴らしいことをやったので、
「シモンもまた自ら信じ、バプテスマを受けて、常にピリポと偕に居り、その行う徴と大なる能力とを見て驚けり」(使徒8・13)

あともう少ししておきますが、今度はロマ書にいきまして、ロマ書1章16節に、
「我は福音を恥とせず、この福音はユダヤ人を始め、ギリシア人にも、すべて信ずる者に救いを得さする神の力たればなり。神の義はその福音のうちに顕れ、信仰より出でて信仰に進ましむ」(ロマ1・16・17)

20節にも、

「それ神の見るべからざる永遠の能力と神性とは造られた物により、世の創より悟りえて……」(ロマ1・20)

コリント前書4章20節、

「神の国は言にあらず、能力にあればなり」(コリント前4・20)



コリント後書4章7節、

「我らこの宝を」

キリストの福音という宝を、あるいはキリストという宝を、

土の器に有^もてり、これ優れて大いなる能力^{ちから}の我らより出でずして、神より出づることの顕^あれんためである。……為^せん方^{かた}つくれども希望^{のぞみ}を失わず……倒さるれども亡びず」（コリント後4・7～9）

というわけです。また、エペソ書1章19節、

「神の大能の勢威^{いきおい}の活動^{はたらき}によりて信する我らに対する能力^{ちから}の極めて大いなることを知らしめ給わんことを願う」（エペソ1・19）

3章16節にも、

「父その栄光の富にしたがいて、御霊により力をもて汝らの内なる人を強くし」

（エペソ3・16）

という、著しい言葉があります。それで、

「かれら力より力に進み遂におのおのシオンにいたりて神にまみゆ」

私たちにおいて、神の力とは何か。これはイエス・キリストの生命であります。断じて魔力的な力ではない。キリストの生命ですよ。これは間違えては困る。

私たちがいかに無力であるかということとは、どこから来たか。それは私たちが罪びとであるということから来ている。この力ということ、私たちは罪の問題と切り離して考えられない。そうでなければ、いわゆる新興宗教式なことになる。聖書におきましては、この力は聖なる神さまの聖なる力です。力の種類が違うのです。力ということで、私たちはただ単なる力を考えてはいけません。

私たちの無力にもいろんな意味がありましょうが、一番無力の中心は何かというと、道徳的に無力である。神さまの前に、私たちが義でありえないということは、私たちの無力の一番のポイントなのです。私たちが本当に力がないということは、神さまの前に義でありえない。神のみ意^{こころ}を身に受けとって、神さまを全身をもって、神を本当に神^{あが}として崇める、そういった礼拝ができない。そういった神の意志を100%に受けることができないという、これが私たちの無力の無力たるゆえんです。しかしです、この無力、ダメにむしろ徹底したらい。しかしそれも自分でできない。ですから、私たちはもう仕方がない。キリストのもとに行かず、自分を肯定するのです、ことに近代の人間というものは。

私たちの道徳的無力というものを本当に私たちに表わしてくれているものは、イエス・キリストの十字架です。十字架において、私たちが如何に無力であるかということを表わし、かつまた、真に私たちを無力にしてくださっている。十字架において、私たちは本当に神さまに対して義であり得ない姿があらわれている。即ち、神の意志を受けとり得ない姿が、それどころじゃない。私たちは、神に反逆しているところの叛^{そむ}きの相^{すがた}があらわれている。



ですから、この十字架において、自分は本当にダメなものであるということを徹底的に私たちが受けとるときに、逆に本当の力がくる。これはキリストの生命なのです。単なる力ではない。即ち、キリストの生命とは、また単なる生命でもない。これは聖なる生命、神の御意を真に立てることのできる活き方、このような活き方の内容が生命です。神の御意を真に立て、神に従って歩くことのできるその力、その生命です。

このようなイエス・キリストが私たちの中に来たとはい、み霊のキリストの来臨です。さきほど使徒行伝に読んだような御霊における力、旧約のミカ書の3章8節の如く、み霊によりて来る力がこのようにして臨む。即ち、イエス・キリストというこの活けるみ霊のキリストが私の中にこの十字架の贖罪を通してやって来ましたから、これ生命です、潔らかなる本当に熱き生命です。これが私たちの中に来ましたから、これは恩恵めぐみです。ですから、どんなにこの涙の谷であつてもいい。どんなに乾いているガサガサの谷でもいい。そこにイエス・キリストの生命がくれば、これは岩から水が湧き出で、即ち沙漠から水が湧き出で、河が流れる。沙漠は、咲きてサフランの花咲くところの野辺となる。創造の力、生命の力が、私たちの中にキリストに在りて来しました。ですから、この詩篇の作者が、

「涙の谷を過ぐれども、そこを多くの泉ある所となすことができる。イエス・キリストが私たちの泉の根源、本当の泉だから、これを泉あるところとなすことができる。なんとすれば、わがうちにこの泉があるから」

と。これはヨハネ伝の4章でサマリヤの女に言われたように、

「汝らのうちにこの泉が湧き出でて流れるぞ、溢れ出るぞ」

という。即ち、泉が湧き出で溢れるというこのヨハネ伝4章の言葉は、正にこの詩篇のこゝを註解するのに最もよき聖言です。

永遠の生命の水

ヨハネ伝4章13節から、

『すべてこの水をのむ者は、また渴かん。然れど我があたうる水を飲む者は、

永遠に渴くことなし。わが与うる水は

即ち聖霊は汝のうちに、

彼の中にて泉となり、永遠の生命の水湧き出づべし』(ヨハネ4・13、14)

「泉となつて永遠の生命の水湧き出づべし」

という。皆さん、この泉が私たちの中にあるのではないですか。「どこに泉があるか」ではない。私たちの中に泉がある。この泉たる、この生命たる力をもたないから、モーヴィンケルは、今のプロテスタントはダメだと言うのです。私たちはそこを主眼として戦つて来ているわけではないですか。皆さんは、その意味において、既に泉をもっているものである。なにも枯れていない。



「私たちの中にはキリストの生命という力があるから、力より力へ進み、キリストの勝利より勝利に進んで、遂におのおのシオンに到りて神にまみゆ」

と。本当に然り、アーメンです。私たちの中に、力の根源、キリストの生命があります。だから、力から力に行かざるを得ないのです。

私たちの生命の根源は、創造者、贖罪主^{あがないぬし}キリストから来る。ですから、この生命を皆さんが戴いていけば、いろいろな相対面の恩恵^{めぐみ}は全部生かされます。病者が手術を本当に活かすもの、薬を本当に活かすもの、お医者さんの言葉を本当に生かすもの、それはキリストを受けた病者の中にある。

甲の人と乙の人が同じものを受けても、キリストを有^もっている人はその受け方が違う。祝福されてしまう。もつと素晴らしく祝福されてしまう。キリストの生命をもつ人は、一切の現象に対して支配的です。また祝福していくことができる。その意味において、「力より力に進み」とは、あなた方がこれを読むときに、既に生命が上から来なければダメです。

「力より力に進み」

と、本当にそうです。

天界のシオン、黙示録に記されてある天界のシオンに私たちは進みまた進んで行きます。おのおの一人ひとりが進んでいきます、互いに道づれとなって。ですから、迫害のためたとえ一人になっても、進みゆくのです。

信仰生活は、パウロもよく例えたように、マラソン競争です。キリストの生命力のある者は、ラストスパートがきく。ゴールに近づくにつれて、底力が出てくる。私なんかも、もしそうでなかったら、こんな貧弱な人間は、とつくの昔にダメになっているわけです。けれども、感謝すべきかな、みたまのキリストの生命は！ ですから、本当にこの詩篇の作者と共に、

「我らの盾なる神よ、みそなわして、なんじの受膏者の顔をかえりみたまえ」

と。詩篇の作者は、受膏者、王様のことを思つて、「顧みてあげてください」と祈っている^{うるわ}麗しい祈りです。私たちにとっては、受膏者はキリストである。キリストであると同時に、受膏者は私たち一人びとりである。即ち、私たち一人びとりがキリストの聖霊なる油を注がれたものであるからです。皆さんは、この生命を得て輝かしくなっている。それはこのキリストの聖霊の生命がきているから、この力がきているからです。

罪と死と陰府^{よみ}とサタンに勝ったキリストの力です。いいですか、そこらの宗教の力とは違うんですよ。現象面では同じようなことがたとえあつても、絶対に惑わされてはいかん。また、観念にも非ず、御利益にもあらず、というのもそのことです。そのような素晴らしきキリストの生命の力、聖なる力、光を、愛を、生命を戴いているとは何たる有難い、素晴らしいことでしょう。

「汝の大庭に住まう一日は千日にもまされり。我は悪の幕屋におらんよりはむしろ、わが神のいへの門守^{かどもり}となることを欲^{ねが}う」



「一日は千日にもまさり」と全くその通り。ペテロがペテロ後書3章8節に言っているでしょ。

「愛する者よ、なんじらこの一事を忘るな。主の御前には一日は千年のごとく、千年は一日のごとし。主その約束を果たすに遅きは、ある人の遅しと思うが如きにあらず、ただ一人の亡ぶるをも望み給わず、すべての人の悔改くわいあらために至らんことを望みて、汝らを永く忍び給うなり。されど主の日は盗人のことぬすびとく来らん。その日には天とどろきて去り、もろもろの天体は焼け崩れ……されど我らは神の約束によりて義の住むところの新しき天と地とを待つ」（ペテロ後3・8、13）

と。キリストの祈り、

「汝の意志を成させ給え」

というのは義ですよ、皆さん、間違えてはこまる。「汝の意志を成させ給え」という在り方を「義」という。それを本当にあらしめていたのがキリストなんです。そのキリストにおいて、私たちは本当の義——正義ではない——をいただきます。

そのキリストと共に在る一日は即ち千日にもまसार。キリストという、活ける神殿、活ける幕屋をもつ者は、その一日は即ち千日にも勝る、一日は千年の如しという。私たちは即ち、この一日において永遠を生きている。キリストが即ち「永遠」であります。皆さん、どうかもうケチくさい考えをやめて、病院における一日も即ち千年の如しと、主にある驚くべき自覚をもつていいんです、イエス・キリストが本当に私たちに生きてくださる限り。

「人生なんでもやって来い。私たちの中には絶対にそれに勝つところのキリストの生命があるんだから。キリストの光があるぞ、天国はこっちにあるぞ」

というわけです。イエス・キリスト！ 何ものをもつても換えることができないものを、皆さん、内容として有っている。もしそうでなければ、これを本当にいただかないで、皆さん、何を求め、何をながめているかということになるのです。

そうしたらば、これをこの詩篇84篇のごとく、真にキリストの力よりキリストの力へと進んでいきます。そうして、これは本当に勝利の前進また前進、勝利の巡礼である。神の国、終末の国を目指しての私たちの巡礼である。なんとならば、

「神の国は既に汝らの中に在るから、来るべき国は大丈夫、お前たちのものである」というんです。そのような具合であって、

「本当にエホバはわが日である、キリストはわが日である、わが盾である。真にエホバに依頼よりたのみ、エホバを一切として歩くところのものは幸福さいわいなるかな」

と。神の栄光が現われるからであります。神の栄光がこの身を通して現われてくださる幸福なのです。

